

国語

注意

- 1 問題は **1** から **5** までで、16 ページにわたって印刷してあります。
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、
解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のA・I・U・Eのうちから、最も適切なものを
それぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、
や「などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えは解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消し残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) クラスの皆にほめられて面映ゆい。
- (2) リーダーとして辣腕ぶりを発揮する。
- (3) 春先に雪溪を渡る。
- (4) 穏当な案を提出する。
- (5) 万古不易の平和を希求する。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 荒天の中、船長が針路についてサイダンを下した。
- (2) 長い間のわだかまりがヒヨウカイする。
- (3) 若い世代に未来をユダねる。
- (4) ダイダンエンを迎える。
- (5) イツシドウジンの気持ちで人に接する。

次の文章は、学生時代に夏目漱石の講義を受けていた中勘助が、ありし日の先生のことを回想して書いたものである。これを読んで、あとの各問に答えよ。なお、作者の表記の特徴として一マス空いているところがある。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

私は大学を卒業した年の秋から翌年の春へかけて半年ほどのあいだ病床にいたあげく夏になって病後の保養のために小田原にある親戚の別荘へ幾月か厄介になつていた。そのあいだに先生の最初の胃潰瘍が起つた。私は電報で修善寺へ御見舞を出した。幾日かのち私は先生がよほどいいということを知つてやほではあるが美しく彩色した蝶形の麦藁細工の籠にいろんな色紙や千代紙でこしらえた折物ちりちりなどを入れて送つた。小宮の代筆かなにかで手紙がきた。鷲、ふくら雀 などと目録を読みながら枕もとへ列べるところかなにか書いてあつた。先生はそれを見て

「このうちに中のこしらえたのは一つ二つしかないだろう。」

といったという。まったく私の造つたのは蓮花と鶴だけだったかもしれない、今でもそれっきりしか折り方をしらないから。その翌翌年の夏私は信州の湖畔へ行つて「銀の匙」の前篇を書きあげた。私がその湖畔から出した絵葉書に対する返事に

「どうしてそんな寒い処へ行きましたか。早くお帰りなさい。」

というようなことが書いてあつた。それからその時かまた別の時か、私が見て下さいと願つておきながら原稿を送ることのあまり延引するのを申訳したのに対していつまでと約束した訳ではないからそんなに義理がたくして無理をしないようにという返事がきた。私はそこで「銀の匙」を書きあげて一里あまりはなれた隣村の郵便局から先生のところへ送つた。私は十月の半頃帰京した。そして先生の都合をきい

たら 原稿はまだ見てないが遊びにならくるがいい というようなことだつた。私をはじめて行つた時のつれはたしか安倍だつたかと思う。私はその日先生のところへ行くつもりもなくぶらりと安倍のところへいつたら これから一緒に行こう ということになつてかなりみつともない着流しのまま出かけた。先生は多分午睡中だつた。暫く茶の間の方で待つたのち安倍の後から 先生はどんなになつたかしら と思ひながら怖ごわはいつていつたらはじめての者には珍奇な感じを与えるあの和洋折衷のがらんとした座敷に寝起きの頗る無愛想な顔をしてちょこんと坐つていた。私はちらりとひと目見て先生が大変な白髪になつたこと、顔がなんだかひどくいかつくとながつた感じを与えるようになったことに気がついた。先生は号令をかけるような具合に指で指図をして並べて敷いてある座蒲団のうえに二人を坐らせた。そして私をぐるりとひとわたり見まわし、私の汚いみなりに注意するようだったがしらずかに

「中君はちつともかわらないね。」

といった、れいの口をあんまり動かさない無性らしいいい方で。私は畏りつつもやっぱり先生をぐるりと一つ見まわした。そして顔のいかつくなつたのは髭を刈込んだせいだと思つた。先生は前掛をしめていた。これは予想しなかつたことだつた。私がそばにある葉瓶に目をつけてなにかいつた時先生はちよつと瓶の頭をもつて

「なにこりや始終なんだよ。」

といった。その時にさっきの寐起きのむつかしい顔が大分和いでいた。私が先生の白髪になつたことをいつたら先生はそれが病氣の後からだといつた。そして

「いつか君がくれた蝶蝶の箱がまだとつてあるよ。」

といいながらふりかえつてそのとつてあるところを見るような風をした。
 (2) ……この日私はあらたまつた時にする私の癖で、首を少し左へかしげるようにして左の目で余計見るような姿勢をとりながらじつと先生の目

を見つめて話したりきいたりした。私は大学以来そのままのいろいろな癖を見出して久しぶりだという感じがした。

その次の時のつれは野上^{のがみ}だった。私がいらずらな心から——先生がこの前目をつけたので——わざとこの前の時と同じ見すばらしい裕^{あむせ}に裕羽織^{はおり}を着ていったことから考えるとそれは最初の時からあまり日数のたないうちのことだったにちがいない。私たちよりも先に一人お客さんがあって書斎のほうに坐っていた。先生は机に向つてなにか原稿らしいものを読んでいた。私はその人が原稿をもってきて見てもらつてるのだと思つた。私たちは隣の客間の方へ通されて待つていた。暫くして先生はそれを読み終つてお客さんと一緒に客間の方へ来た。挨拶がすんですぐだったか、二言三言いつた後だったか、先生はやや唐突^{ちやうたく}に

「ありやいいよ。」

と例の口を動かさないいい方でいつた。私が今日来ることを予報しておいたのでまだ読みきつてなかつた原稿をお客様を待たせようど今読み終つたのだつた。⁽³⁾私は心のうちで恐縮した。先生は予想外に「銀の匙」をほめた。落ちついた書き方だといつた。大変口調がいいといつた。私は文章が時に稚氣を帯びてやしまいかと思つといつたらむしろその反対を考へてゐるらしい口吻^{くぶん}をもらした。先生はまた正直に書いてあるといつてそのあとで

「ああいう意気地のないことを……。」

といいかけたが遠慮するよくな風にちよつと言葉をきつた、なにか意気地のないということが非常な悪いことでもあるかのように、そして私⁽⁴⁾がそんな子供であつたことを赤面でもするかのようになつた。先生はこうして私をよく知らないための勘違いからその後も話の間にそんなつまらない

ことについて時どき親切な遠慮をしてくれたように思ふ。先生は私の文章に源氏物語^{げんじものがたり}のようなどころがあるといつたのには少し非難の意味があつたかと思ふ。それから原稿が汚くて読みにくいこと、誤字の多

いこと、仮名を「めちやめちや」に沢山使うことを非難した。それは事実だつた。仮名を多く使うことについては一つは私の或主義^{あま}から、一つは漢字に好悪^{こうお}があるので嫌な漢字を出来るだけ使わないためにそうするのだったが、私はそのとき格別そんな弁明はしなかつた。しかしいつか友人からでもその理由をきいたのか、その後「銀の匙」の後篇に私は全く遠慮なしに仮名を用いたけれど先生はなんともいわなかつた。私はそれをそんなにたいした訳^{わけ}もない単なる他人の好悪のよくなものをさへ出来るだけ尊重するという先生の寛容、親切からと解している。先生はまた「銀の匙」を平面的だといつて、廻り燈籠^{まわりとうろう}みたいにいるんな事件人物が出てくる間に自然に主人公の性格がわかるようになってるんだねというよくなことをいつた。先生が

「ありやいいよ。」

をもう一遍くり返したとき私はすかさず

「よければまだ先があります。」

といつた。先生はちよつとたじたじとした様子で

「もう沢山だ。」

といつたがすぐにもり返し反対に攻勢をとつて

「なかなか面の皮が厚いな。」

⁽⁵⁾皆が笑つた、私も一緒に。先生は「銀の匙」の中に出てくる小学校の先生が主人公に向つていつた言葉を覚えていてさそくのき^{*}んに用いたのだ。こんな言葉戦いの駈引^{かけひき}は手に入ったものだつた。

(中勘助「夏目先生と私」による)

〔注〕先生の最初の胃潰瘍^{いはいよう}が起つた

——明治四三年、漱石は伊豆の修善寺の旅館で大吐血をして、危篤状態に陥つた。

ちりちり——大麥を煎^いつて焦がし、白でひいて粉にしたもの。

小宮——小宮豊隆。学生時代の同期で漱石の弟子。

ふくら雀——肥えふくれた雀の子。

安倍——安倍能成。学生時代の同期で漱石の弟子。

着流し——男性のくだけた和服姿。

午睡——昼寝。

無性——面倒くさがること。

野上——野上豊一郎。学生時代の同期で漱石の弟子。

裕——裏地をつけた和服。

口吻——話しぶり。

源氏物語——平安時代に紫式部が書いた長編物語。

廻り燈籠——ろうそくの火をとますと、いろいろな形を切り抜い

た内側の円筒が回転し、外側に張った紙や布にその影

絵が映るようにした灯籠。

さそく——早速。

〔問1〕 暫く茶の間の方で待ったのち安倍の後から 先生はどんなに

なったかしら と思ひながら怖ごわはいつていつたらはじめての

者には珍奇な感じを与えるあの和洋折衷のがらんとした座敷に寝

起きの頗る無愛想な顔をしてちょこんと坐っていた。とあるが、

「私」が「怖ごわはいつていつた」理由として最も適切なのは、

次のうちではどれか。

ア 安倍から様子は聞いていたが、はじめての訪問ということもあり、

先生の暮らし向きが気になっていたので。

イ 随分と遅れて郵送した原稿の評価が気になっており、先生から厳し

い指摘を受けるのではないだろうか、と恐れていたから。

ウ 先生には長い間会っておらず、修善寺での大病の後に容体が落ち着

いたと聞いたものの、先生の体が心配でならなかったから。

エ 原稿を見て欲しいと依頼しながら連絡もせず、みっともない格好で

突然訪問したので叱られるのではないかと気が引けていたから。

〔問2〕 ……この日私はあらたまつた時にする私の癖で、首を少し左へ

かしげるようにして左の目で余計見るような姿勢をとりながらじつと先生の目を見つめて話したりきいたりした。とあるが、この時の「私」の心情の説明として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア すっかり変わってしまった先生の容貌を注意深く観察しながら、早く回復して学生時代の頃のように元気になってほしい、と願っている気持ち。

イ 生死をさまようような大病は、人の容貌や振る舞いをもすっかり変えてしまうのだ、と感慨にふけりながら学生時代を遠くに感じている気持ち。

ウ 大変重い病気の後に白髪になり、学生時代とすっかり変わってしまった先生の容貌を見て、老けてしまったことを気の毒に思っている気持ち。

エ 大病をしてすっかり容貌が変わってしまったが、学生時代と変わらぬ先生のしぐさを目にして、安堵するとともに懐かしさを覚えている気持ち。

〔問3〕⁽³⁾ 私は心のうちで恐縮した。とあるが、その理由として最も適切

なのは、次のうちではどれか。

ア 先客の原稿を読んでいると思っていたが、実は客人への応対を後回しにして「私」の原稿を読んで評価してくれたことに、申し訳なさと感謝を覚えたから。

イ 野上と一緒に先生のもとを不意に訪ねたので、先客を待たせて自分の作品を読ませることになってしまい、客人と先生に申し訳なさを感じたから。

ウ 「私」の原稿を自分では稚拙な文章だと思っていたが、子供の頃のことを正直に書いていてよい、と先生から予想外の評価を受けたことに感謝したから。

エ 療養中の身であるにも関わらず、先客の原稿と「私」の原稿とを丹念に読んでくれた先生の優しさに対して、感謝するとともに申し訳なさを感じたから。

〔問4〕⁽⁴⁾ 先生はこうした私をよく知らなかったための勘違いからその後も話の間にそんなつまらないことについて時どき親切な遠慮をしてくれたように思う。とあるが、「親切な遠慮」の説明として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 「私」が恥ずかしいと思っただけは、控えてできるだけ言わないでおこうと思っただけで言葉を使い、体面を傷つけないように配慮して激励する先生の心遣い。

イ 「私」の主義や好悪のようなものまで尊重し、原稿の読みにくさや誤字の多さを非難することなく、控えめに注意して細かなところまで気を配ってくれる先生の心遣い。

ウ 「私」を取りまく環境についてはよく知らないけれども、子供の頃はみな意気地がないのだから小さなことに悩む必要はない、と「私」を大切に扱って話す先生の心遣い。

エ 「私」が気にしていないことについても気持ち傷つけないように注意を払い、自分の考えを押しつけることなく「私」の考えを尊重し、必要以上に気を配る先生の心遣い。

〔問5〕⁽⁵⁾ 皆が笑った、私も一緒に。とあるが、「皆」の笑い、「私」の笑いには違いがある。それを説明した次の文章の空欄に当てはまる言葉を二十五字以上三十五字以内で書け。

「銀の匙」を先生が評価してくれた時、「よければまだ先がありません。」と私が答え、それを聞いて先生は「なかなか面の皮が厚いな。」と茶化して言った。そのことに対して「皆」は笑ったが、「私」はそれに加えて、【
】から笑った。

〔問6〕 本文の内容や表現について述べた説明として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 「私」と先生との軽快な会話から、お互いを思いやる心情を読み取ることができるよう描かれている。

イ 「前掛」をしているという先生の外見の描写によって、病氣療養の事実と「私」の驚きが表されている。

ウ 大病後の先生の様子を「私」や友人たちの視点から多面的に描き、先生の優しさが巧みに表現されている。

エ 「私」は病後の先生に自分から進んで見舞いを出したり訪問したりして、先生への思慕を募らせている。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

空間の豊かさを問うことのなかに、地球環境全体の問題が含まれることはいうまでもない。地球環境の危機が空間の豊かさを損なう最大の要因であることを思うとき、「空間」と「環境」の問題がわたしたちの中心的な課題としてクローズアップされてくる。人間が自然環境に対してとってきた態度を再検討するという課題である。

(1) 人間が自然に対してとってきた態度を考察することは、「環境倫理の再検討」ということができる。ふつう「環境倫理」ということばは、わたしたちが自然環境に対してもっている姿勢、態度、心構え、信条、あるいはこうした心的傾向にもとづく行為などを指す。しかし、新しい環境倫理の必要性が主張されるとき、この「環境倫理」ということばは、人々が一致して行動できるような原理・原則を意味するであろう。現在国連を中心に進められている総合的な理念の策定は、このような意味で、行動の原理・原則を国際的な規模で、つまりグローバルな規模で定めようというものである。

「グローバル」は「ローカル」に対して、「地球規模で考え、足下から行動せよ think globally, act locally」という標語にもあるように、対照的な意味で用いられる。地球環境問題は、地球規模の問題であることから、グローバルな思考を求められるのは当然のことであろう。⁽²⁾ただ、問題なのは、ローカルということが、グローバルな理念の実行の場として理解されていることである。このことは、全地球規模の行動原理がどこでも同じように実行されるべきだということを暗に意味するであろう。ところが、現在問題になっているのは、グローバルな思考にもとづく政策が地球上どこでも一律に適用されることから発生する問題、すなわち、⁽³⁾「think globally」や「think locally」の対立の問題である。

広いえば、地球規模の行動原理の策定とその応用という発想そのも

のが、一種のグローバリズム、あるいはむしろユニバーサルizm(普遍主義)に由来する発想であって、ローカルなものをその一部ないし特殊な場合ととらえる立場に立っている。先進諸国の採用する原理をひとつのグローバルな原理、さらに普遍的な原理として採用し、それを全地球規模で実施しようという政策そのものが、多様な地域の独自性を一種の普遍性のもとに包摂しようという意図にもとづくものとも考えられる。そこで、第一に、このような普遍的な原理の意義が問われなければならない。また、第二に、欧米において考案された原理をグローバルな原理、さらには普遍的な原理とすることができるといふ重要な問題がある。

もっと具体的な場面では、現在、「持続可能な発展」という理念が一九七二年のストックホルム国連人間環境会議で提案され、一九九二年のリオ・デ・ジャネイロ・サミットで確認されて、地球環境問題に対するひとつのグローバルな理念となっている。こうした理念のもとで展開される国際的な政策が、ある特定地域の固有の問題と衝突する場合がある。たとえば、熱帯雨林の保護が当該地域住民の生活の持続と衝突する場合などである。このとき「ローカル」は「グローバル」の一部ではなく、むしろ両者は対立の可能性をもつてくる。

ただ、ここで重要なのは、「グローバルであること」は「普遍的であること」を意味しないということである。グローバルであるということとは、現在地球上でもっとも広範に受容されている理念ということであり、永遠に受容されつづけるということを含んではいけない。なぜなら、地球環境の悪化によってもはや「発展」が望みえないような状況も将来考えられるからであり、また持続可能性すら望みえないような事態もありえないことではないからである。そのような状況下では、もはやこの理念は妥当性を失うであろう。

したがって、「グローバルであること」を「ユニバーサルであること」、普遍的であること」から区別しなければならぬ。普遍的であることは、

時、所にかかわりなく妥当するということであり、グローバルということとは、ある時点で地球全体にわたって妥当するということである。⁽⁴⁾すなわちグローバルな基準を定めることは普遍的な原理を見出すことではない。この意味で、「持続可能な発展」というのは、せいぜいグローバルな基準としての理念ということになる。

環境倫理には、人間の空間的、時間的条件が含まれなければならない。したがって、倫理が人間の行為にかかわる価値の問題であるとすれば、環境にかかわる価値の構造を、人間の基本的な条件としての空間性と時間性から論じる必要がある。では、空間性と時間性を視野に入れるときに、「グローバル」と「ローカル」の関係はどのようなものとして理解されるのだろうか。そしてまた、環境に関する行動理念の構築はどうあるべきなのだろうか。

環境問題は、直接的に人間にかかわるものとしては、生命と健康の問題としてとらえることができる。一九六〇年代の高度経済成長期には、環境問題は公害という重大な社会問題となったが、そこでは人間の生命と健康が中心的な関心事であった。

命と健康が問題となるのは、環境中の物質が生命と健康を損なうからである。この意味で、環境の空間性と物質の移動および人間の身体的条件の関係が重要である。つまり環境の問題は、人間がなによりも身体的な存在であること、有害物質が環境中を移動すること、そして、身体がどのような配置をもつかということと切り離すことができない。この事情は地球規模になっても同じである。有害物質の全地球的な拡散や温暖化、オゾンホールの問題、あるいは最近の環境ホルモンなど、どれも環境中の物質の状態と身体の空間的な条件が基礎にある。

そこで、⁽⁵⁾環境問題にかかわる人間の基本的な条件に対し、わたしは「身体の配置」という概念を適用したい。地球環境問題をその基礎から考えるばあい、ひとりひとりの人間がどのような身体的配置をもち、そ

れぞれの生命と健康を持続しているかということがまずなによりも重要である。

身体ミヤの配置とは、ひとりひとりの人間がこの地球上のある地点に空間的広がりをもって配置されているということである。その配置を決定しているのは、身体がこの空間で他の人間や事物、空、大気、水、大地とどのような全体的な関係にあるかということ、また地球上のさまざまな事物とどのような関係のもとにあるかということである。

身体ミヤの配置はたんに環境と人間を理解するための概念ではない。身体ミヤの配置がひとりひとりの人間の個性の源泉である。この配置を他者がとって代わることはできない。わたしたちはこの配置のもとで、世界を知覚し、記憶し、行動の基礎とする。ローカルに行動すること、足下から行動するということは、この配置を心得たうえで行動するということである。また、人間は、「ローカルであること」によって、ある特定の歴史的空間に存在し、また、行為するものとして理解される。この意味で、⁽⁶⁾どんな人間もそのローカルであることにおいて、他の人間と異なる固有の履歴をもつ。

(桑子敏雄「環境の哲学」による)

〔問1〕⁽¹⁾ 人間が自然に対してとってきた態度を考察することは、「環境倫理の再検討」ということができる。とあるが、筆者が考える「環境倫理」とはどのようなものか。次のうちから最も適切なものを選べ。

- ア 人間の自然環境に対するかかわり方について、各国の基準を取り入れて総合的に定めた原理・原則。
- イ 人間の自然環境に対するかかわり方について、各自が身近なところから行動するための原理・原則。
- ウ 人間の自然環境に対するかかわり方について、先進諸国の実践をもとに国連が策定する原理・原則。
- エ 人間の自然環境に対するかかわり方について、地球全体規模で共有されるべき基本的な原理・原則。

〔問2〕⁽²⁾ ただ、問題なのは、ローカルということが、グローバルな理念の実行の場として理解されていることである。とあるが、「ローカル」ということが、グローバルな理念の実行の場として理解されていること」が「問題」と筆者が述べるのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

- ア 先進諸国の採用するグローバルな原理は、多様な地域の独自性をもつローカルな開発途上国の経済発展には直結しないから。
- イ 先進諸国の採用する原理を普遍的なものと考えて、ローカルのもつ多様な地域の独自性を考慮せずにあてはめようとするから。
- ウ 欧米において考案された原理をグローバルなものと考えて、ローカルなもの特殊ととらえて地球環境問題と切り離そうとするから。
- エ 欧米において考案された原理を普遍的なものと考えて行動原理は、特定地域のもつローカルな文化を滅ぼす方向に常にはたらくから。

〔問3〕「think globally」と「think locally」の対立の問題とあるが、

その具体例として適切でないものは、次のうちではどれか。

ア 世界遺産に登録された街が観光地化することにより、高層ビルの建設や工場の誘致が困難になってしまうことがある。

イ 海洋資源の保護のために各国に定められる漁獲高制限により、漁業従事者の収入が減ってしまうことがある。

ウ 通信技術が高度に発達して情報網が世界中に広がることにより、地域ごとの時差に対する配慮が欠如してしまうことがある。

エ 農産物の関税引き下げで市場が世界規模になることにより、競争に負けた国内の第一次産業が衰退してしまうことがある。

〔問4〕⁽⁴⁾ すなわちグローバルな基準を定めることは普遍的な原理を見出すことではない。とあるが、ここでの「グローバルな基準」とは

どのようなものか。その内容を説明した次の文の空欄に当てはまる言葉を四十五字以上六十字以内で説明せよ。

グローバルな基準とは、

」

〔問5〕⁽⁵⁾ 環境問題にかかわる人間の基本的な条件に対し、わたしは「身体（5）の配置」という概念を適用したい。とあるが、筆者がそのように考えるのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 「身体（5）の配置」とは、人間が世界という空間の広がりの中で生きていくととらえることであり、生命と健康の問題としての環境問題と不可分の関係にあるから。

イ 「身体（5）の配置」とは、地球規模の広がりの中で人間がどのように劣悪な環境に置かれているかを知るためのものであり、地球環境問題を考え直す上で有効な手段となるから。

ウ 「身体（5）の配置」とは、有害物質の拡散と人間の身体的条件との関係を知る指標であり、地球規模の環境と個別の人間の環境とを同時に改善するための必須条件であるから。

エ 「身体（5）の配置」とは、世界的な人間関係の広がりを経験的に把握することであり、環境中の人間の身体が今後どのように変化していくかを予測する材料であるから。

〔問6〕⁽⁶⁾ どんな人間もそのローカルであることにおいて、他の人間と異なる固有の履歴をもつ。とあるが、どのようなことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 身体（6）の配置を個別にもっている人間は、それぞれが存在する歴史的空間の違いによって、地球環境問題に対して個性的な行動を工夫できる存在であるということ。

イ ひとりひとりの人間は、身体的存在として周囲の環境と結んだ個性的な関係のもとに行動し、それぞれの過去を積み上げた唯一無二の個性的存在であるということ。

ウ 人間は誰しも、ある特定の歴史的空間の中で行動している存在として理解され、身体（6）の配置を移動させることで他者との差異を明確化していく存在であるということ。

エ 空間性と時間性を基本的な条件にもつ人間は、地球規模のグローバルな存在であると同時に、自身が行動する場としてのローカルな空間を保有している存在であるということ。

〔問7〕 空間の豊かさとあるが、あなたはどのように「空間の豊かさ」に貢献することができるかと考えるか。あなた自身の「身体の配置」に言及しつつ、「空間の豊かさ」について具体的な例をあげて、あなたの考えを二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄や、や。や。「などもそれぞれ字数に数えよ。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。なお、本文中に引用されている原文の後の〔 〕内は、現代語訳である。（*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

歌にとつての鄙^び地方が何だったかは、歌枕の存在がよく示している。歌枕とはもともと歌に使用すべき言葉、すなわち歌言葉のことだった。それがいつからか歌に関わる地名のみをいうようになったのは、旅をいう草枕と関係があらう。歌に関わる地名とは旅の地名にほかならないからだ。では旅の地名なら何でも歌枕になりえたかといえは、そうではなかった。歌枕になりえた地名はほんらい吉野、伊勢、富士……など信仰に関わるものだった。旅先で土地の名を賞めることで土地の神神の加護を願うというのが、歌における歌枕の存在理由の原点だったにちがいない。

ところが、歌枕が歌にうたわれると、歌の中の歌枕じたいが一種の信仰の対象になってしまう。そうなると、じつさいに自分が歌枕の地に行くのではなく、先人の歌にうたわれた歌枕を自分の歌でなぞることが歌枕の地に行ったことと等しいことになってしまう。いわゆる歌枕による題詠で、右方・左方に分かれて歌の優劣を競う歌合や屏風の絵に歌を書き添える屏風歌の流行は、この傾向に拍車をかける。勅撰集羈旅の部に収められた歌における旅とは、多く題詠における歌の上の旅、想像上の旅で、⁽¹⁾じつさいに歌枕の地に赴くことはほとんどなかった。

例外は平安中期の、一説に馬の売買に関わったともいう歌僧能因と、同末期の北面の武士から出家した西行で、ともに再度の陸奥行のほか、各地を旅して多くの歌枕の地を踏んでいる。能因の歌枕でなかんずく知られているのが白河だ。

都をば霞と共に立ちしかど 秋風ぞ吹く白河の関

都を、春霞が立つのとともに出発したが、いつのまにか秋風が吹く季節になってしまったことだ。この白河の関では。

〔「新日本古典文学大系」による〕

この歌の裏付けとなっている臨場感は、逆に能因が想像でこの歌を作り、現地に旅して作ったと見せかけるために、都で人に隠れて顔を焼いていた、という伝説を産んだほどだ。西行はそんな⁽²⁾「訊知り顔」な伝説は信じなかった。

陸奥の国へ修行して罷りけるに、白川の関に留まりて、所柄にや常よりも月おもしろくあはれにて、能

因が「秋風ぞ吹く」と申けん折何時なりけんと思出でられて、名残り多くおぼえければ、関屋の柱に

書き付けける

白川の関屋を月の洩る影は人の心を留むる成けり

東北地方へ修行の旅をして行った時に、白川の関にとどまったのであるが、場所柄によるのであろうか月はいつよりもより趣深く心にしみて、能因が「秋風ぞ吹く」と詠んだ折はいづごろであったのだろうかと自然と思ひ出されて、名残多く思われたので、関屋の柱に書き付けた歌白川の関所を守る関守の住む家に洩れ入る月の光は、能因の昔を思い出させ、人の心を引きとめて立ち去り難くさせることだよ。

〔「日本古典集成」などにより作成〕

詞書から能因の歌の中の「白河の関」に惹かれたことが、西行の初度陸奥行の原因の一つだったことがわかる。西行は能因の歌に惹かれて白河の関に来て、能因の「秋風」とは別の「月の洩る影」を発見する。すると、以後の人は「白河の関」と聞くと、能因の「秋風」とともに西行の「月の洩る影」を思い出さないうけにはいなくなる。こうして歌枕が伝えられていくさまは、あたかも本歌に似ている。⁽³⁾歌枕がかくも大切にされてきた理由は、本歌の初源が神の歌だったのと同じく、歌枕の初源が神の聖地だったからだ。

歌枕で特記すべきは後鳥羽上皇だ。上皇は歌枕の地から最も遠い地点、宮廷の頂点にあつて想像上の歌枕に遊んでいた身だったが、はからずも承久の乱に敗れ歌枕の地、隠岐に流されたことで、歌枕を身をもって二十年近く生きたことになる。配流の地での上皇のあまりにも有名な歌

われこそは新島もりよ隠岐の海の荒き浪かぜ心して吹け

私こそはこの隠岐の島の新任の島守なのだ。荒々しく吹く海の風よ、この私をいたわって心して吹いてくれ。

(「鑑賞日本古典文学」による)

は、これまた有名な小野篁の「わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人にはつげよ海人の釣舟」の隠岐流謫をなぞるだけでなく、隠岐から遠望する出雲の地に高天原から神遣らいに逢った速須佐之男命の、そしてまた宮廷から夷狄征伐の名のもと追放されつづけ出雲にも足跡を残した倭建命の流謫をなぞるものでもあったはずだ。

連歌は甲という人の長句五・七・五に対して、乙という人が短句七・七を付ける短連歌から、さらに乙の短句七・七に対して甲または丙が長

句を付ける鎖連歌、この長―短―長……の歌の鎖がつきつぎに続いて五十句続く五十韻、百句続く百韻、さらに百韻が十続く十百韻を産んだ。短連歌から始まった長連歌の流行は、おそらく作り手たちの生活手段としての旅と関係がある。制度的に宮廷に縛りつけられた公家と異なり、地下連歌師たちは都を起点に諸地方を往き来した。もしその旅を流謫というなら貴人の運命の代行者としての流謫であり、彼らはその代行者としての旅をむしろ愉しんだし、貴人たちは自分たちの運命を代行してくれる彼らの旅を応援した。

たとえば連歌の大成者ともいえるべき宗祇は、江州または紀州の名もない庶民の家に生まれている。若くして京に上り仏道修行ののち、壮年に達して和歌・連歌に専念、四十歳代も半ばになって専門連歌師になった。のちには皇族・公家など貴人に古典講読の師として迎えられた。いっぽう応仁の乱の余燼消えやらぬ京を基点に、文化的・政治的裏工作の使命を帯びて諸国にしばしば旅をおこなっている。足跡は東は奥州白河の関、西は筑紫太宰府に及び、死んだのも信州から富士への旅の途次⁽⁴⁾の相州箱根湯元だった。彼の貴人の運命の代行者としての旅は、かつての人麻呂ら貴人の代行者としての旅に較べられよう。

(高橋陸郎「読みなおし日本文学史」による)

〔注〕 題詠——あらかじめ決められた題によって、詩歌を作ること。

歌合——平安時代以降に流行した文学的遊戯。左右二組に分かれた歌人が同じ題で詠んだ和歌を一首ずつ出し合い、優劣を比較して勝負を判定した。

北面の武士——上皇の御所の北面にいて警護にあたった武士。なかんずく——とりわけ。特に。

詞書——和歌を作った日時・場所、成立事情などを述べる前書き。

本歌——先人の歌を踏まえて和歌等を作った場合の、もととなつた歌のこと。

わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人にはつげよ海人の釣舟

——大海を多くの島々めざして漕ぎ出てしまったと、都の人々には告げてくれ、漁師の釣舟よ。「新日本古典文学大系」による)

流謫——罪によって遠方に流されること。

高天原——日本神話における、神々が住む天上界のこと。

地下——官職などの公的な地位を持たない人。庶民。

余燼——燃え残っている火のこと。出来事のあとに残った影響をたとえたもの。

人麻呂——柿本人麻呂。『万葉集』を代表する飛鳥時代の歌人。歌をもつて宮廷に仕えていたと考えられている。

〔問1〕⁽¹⁾ じっさいに歌枕の地に赴くことはほとんどなかった。とある

が、これと同じ意味を表した箇所を、本文中から十二字でそのまま抜き出せ。

〔問2〕⁽²⁾ 訳知り顔とあるが、どのような意味か。次のうちから最も適切ななものを選べ。

- ア 事情をよく知っている、というような態度や顔つき。
- イ 上手に言い訳している、というような態度や顔つき。
- ウ 世の中に精通している、というような態度や顔つき。
- エ もっともな理由がある、というような態度や顔つき。

〔問3〕 次の発言は、西行の歌「白川の関屋を月の洩る影は人の心を留むる成けり」について生徒たちが意見を出し合ったものである。

歌の解釈として最も適切なものを、次のうちから選べ。

ア 秋風が吹くころに白川に着いたという能因のことを思い出し、自分が今見ている月と同じ秋の名月を、能因も同じ場所で同じ日に眺めていたのだと、時間を越えて心を通わせているようだね。

イ 月の光は、いつ見ても不思議と人の心を引きつける。「人」とは「白川の関屋」に住む関守のことで、見慣れているはずの白川の月なのに「心を留むる」と詠み、常に変わらぬ月の魅力を強調しているね。

ウ 「洩る」は、月の光が「洩る」と白川の関を「守る」とを掛けているね。洩れ入る月の光が旅人の心をとらえて引きとめる様子を、まるで人をとめて関所を守っているようだと言っているね。

エ 修行のための旅なのだから、つらく厳しいものだったのだろう。能因も訪れた白川で目にした期待通りの月の美しさは、西行の心を「留むる」とともに、「富むる」すなわち豊かにしてくれたはずだ。

〔問4〕⁽³⁾ 歌枕がかくも大切にされてきた理由とあるが、その説明として最も適切なものを、次のうちから選べ。

ア 歌枕の伝承は、旅において訪れた場所を歌に詠み、土地の神に旅程の無事を祈願したことにはじまるから。

イ 歌枕の伝承は、信仰に関わる地名をうたうことにより、聖地巡礼の旅と同じ御利益を期待したものだから。

ウ 歌枕の伝承は、先人が訪れた旅先への憧れから、自分も訪問できるようにしようと神に祈ることに由来するから。

エ 歌枕の伝承は、地名に込めた信仰心を主題とした本歌を、大切に歌い継いできたことにならっているから。

〔問5〕⁽⁴⁾ 彼の貴人の運命の代行者としての旅とあるが、どのようなことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 高貴な家柄に生まれて宮廷制度に縛りつけられていた人々に命じられ、諸国で見聞したことを都に戻って報告して、貴人を楽しませるための旅のこと。

イ これまでの歴史の中で、速須佐之男命や倭建命といった古代から繰り返されてきた流謫をなぞり、配流された人々の心情を思いながら行う旅のこと。

ウ 戦乱の中で地方へ流され、都に戻ることが許されなかった貴人たちの依頼により、配流の地と都との連絡を密に取るために往復した旅のこと。

エ 立场上、自由に都を離れることができなかった貴人たちの思いと支えを受けて、責任を負いつつも楽しみながら行われた諸国への旅のこと。

4
—
口

口

五
口